

【佳作】

無能

大下 和音（広島県 安田女子中学校 3年生）

両手にコインを一枚ずつ握り、左手で右の袖を捲って何も無いことを示す。次はその逆。スリー、ツー、ワンでコインを消し、両手を広げてコインがどこにもないことを見せる。観客から歓声が上がる。この瞬間が一番嫌いだ。

大道芸人になってもう何年になるか、と僕は心の中で呟いた。人を騙して金を儲けて何が楽しいのか。そもそもなぜならうとしたのか。

トランプを箱から取り出す。

子供の頃から手を触れずに何かを動かしたり人の考えていることを当てたりするのが得意だった。スプーンもよく曲げた。

客にカードを渡し、よくくっつけてもらう。

僕にとっては全て当たり前だった。スプーンが曲がることも、サイコロの出目を操れることも、他人の頭に浮かんでいる数字を当てられることも。

好きなカードを一枚選ばせ、そのカードを除き再びくらせる。

周囲とのズレに気付くのにその時間はかからなかった。目立たないような地味に過ごしていた小学生最後の日、お楽しみ会で一人一人が特技を披露する、ということになってしまった。出席番号

が一番だった僕はまともなネタを考える暇がなかったので、仕方がなく五色のチョークを手を触れずに動かして黒板に「今までありがとう」と書いて「マジックです。」と言った。

「さあ、それじゃあ当てますよ。」

僕は指を鳴らす。

ああ、思えばあれがきっかけだった。数秒の沈黙の後「朝井凄え!」「マジック?」「糸とか使ったの?見えなかった!」と僕を褒めたたえる声が一斉に上がった。とどめは泉さんの放った「朝井君、マジシャンになったら?」の一言だ。氣立てが良く、美人な泉さんのことが当時好きだった僕はまんまと自尊心を満たされた。

「あなたが選んだのはスペードの一ですね。」

「はい、そうです!」

ぱらぱらと拍手の音がする。今時珍しい指笛も少し。

僕が選んだのはペテン師の道ですね。はい、そうです。こちらは拍手も、指笛も聞こえない。脳内には観客がいないのだから当たり前だ。

「では続いて。」

スペードの一を返してもらいもう一度くる。

「全てのカードを一瞬にしてジョーカーに変えます。」

パラパラとリフルする。この作業は氣力を使う。三度目でインクを移動させ、ジョーカーのカードに見せるのは僕でも大変だ。

二度目のリフルにさしかかった時、観客から

「あーあーもういいよ。くっそつまんねえなあ。」という声が聞こえた。思わず手を止める。ここまで分かりやすい野次を飛ばされたのは初めてだった。

野次を飛ばした男は勇み足でこちらに歩いて来た。中年で、人

相が悪く、決して聡明深そうには見えませんが眼鏡をかけていた。僕の目の前に立つ。

「なあお前、それでもマジシャンか？」

「ええ、そうですけれど。」
カードを置く。

「いけ好かねえ。」

僕の返答を聞いて男はあからさまに顔を顰めた。

「お前、『犬も歩けば棒に当たる』って諺知ってるか。」

唐突に問いかけられる。

「ええ、当然。」

「じゃ、その諺に二つ意味があるのは知ってたか？ 思いがけない災難に遭うことと、もう一つ、幸運に出会うことにも使われるで、だ。一つ訊くが。」

ドン、と机を叩かれる。カードが落ちた。

「今俺がお前のパフォーマンスを止めに入ったのは、どっちだ。」

「どっち？」

「災難か、幸運か。」

「そりゃあ災難でしょう。」

「正解だ。答えは幸運。よしよし、よく出来たな。」

「いや僕は。」

「幸運なんだよ。」

声を低くして言われ、頷かざるを得なくなる。

周りを見ると悔しいことに人が増えている。が、この場合は観客ではなく野次馬だろう。僕は溜息を吐く。

目を戻すと、男は机の上や下に準備してあった小道具を弄りだしていた。種も仕掛けもないので隠す必要はないが、好き勝手やられると少し腹が立つてくる。

「見てな。」

僕が文句を言う前に男は緑色のライターと煙草を手にしていった。

「皆さん、こんな感情の起伏もない、雰囲気も出せないマジシャンより、私の方がよっぽど上手いですよ。これから喧嘩でも始まるんじゃないかと期待してた野次馬の皆さん、帰らないで！ ここにいる限りはもう観客なんです。私は日本のタマリッツとも呼ばれるプロマジシャンです。タマリッツの特徴は何ですか？ん？ ああ、ええ、そう、そうです、先が読めない、そこなんです。ええ。ということで、今日は先の読めないマジックをしてみようと思います。はい、拍手！」

ざわめき始める夕暮れの街頭。遠くで鳥が鳴くの混じってチツという音が聞こえた。

慌てて男の近くにいた数人が拍手する。

「ちよっと足りない気もしますが、ま、いいでしょう。今拍手しなかった奴らにはマジックが成功した後で手から血が出るまで拍手してもらおうとして、いの一発に拍手して下さったそのお兄さん、ちよっとこのライターで煙草に火を点けて頂いてもいいですか？」

指名された青年は慣れない様子でライターをカッチ、カッチと鳴らす。五度目でやっと点いた。

「どうも！」

男が大声でお礼を言った時にはもう、客の声は聞こえなくなっていた。皆男の方を、詳しく言えば男の手元を見つめておりその光景はどこにもある怪しい宗教団体を彷彿とさせ、僕の背筋を凍らせる。

「このように、このライターからは普通に火が出ます。」

「当たり前だろ！」

野次馬だった男の一人が声を上げたので僕は少しほっとした。

よく考えればパフォーマンス中全員の視線が一点に集まるのは当たり前前のことで、宗教のそれとは全く違う意味の注目だ。

「うるせえ黙ってろ、夏にしまい忘れられた扇風機みてえな顔しやがって。」

男は僕に野次を飛ばした時の口調に戻って罵った後、人格が入れ替わったように優しい笑顔を浮かべ

「申し訳ありません、口が悪いだけで悪気はないんですよ。はは。」と頭を掻いた。

「皆さんも笑っていいんですよ。というか、笑って下さい。」肩をすくめて見せる。笑いが起こらないことを確認して男は口を尖らせながらライターをカチカチとやる。

「まったく今日は獅子座は何をやっても皆の人気者って言ったのによお。ああもう俺は嫁と子供が何と言おうが朝の占いは信じないね。絶対。」

下を向いて僕にしか聞こえない声でぼそぼそと呟く。

こいつ、家庭持ってるのか。僕は特に知りたくもない情報だったのにも関わらず素直に驚く。

「気を取り直してえ！」

勢いよく顔を上げて男が叫んだ。その場を立ち去ろうとしていた十数名がびくつとなる。

「さあさあ、よく見ていて下さいよーはいっ。」

高く投げられたライターに客の視線が注がれる。落下地点に口を開けて待つ。まさか、と思った瞬間ライターは男の口に吸い込まれていた。喉が波打つ。

間があって、客が騒ぎ出す。僕は男の背中を強く叩いた。

「痛い痛い痛い、そんな興奮しなくても、感動は拍手で伝えてくれよ。」

「呑気なこと言っていないで、早く吐き出して下さい。あれ、多分、呑みこんだら駄目なやつですよ。」

「うるせえなあ。もういい大人なんだ。ライターぐらい自由に吞ませろよ。何で呑んじゃ駄目なんだよ。」

「体に悪い物質が入ってそうですよ。」

「例えばどんな。」

「アルコールとか。」

「ならいいだろ。酒は皆飲んでんじゃねえか。」

「とにかく、吐き出して下さい。」

「まあ、見てなつて。」

男はへっへと笑って高そうな革財布をひっくり返した。安っぽい音を立てて転がる小銭はよく見ると全て一円玉だ。少なくとも五十枚はあるように見えた。誰も動かず呆然としている。万札ならともかく一円のために腰を屈める気はないらしい。無論僕もそうだ。冷たい目で男を見ている。

「ああ、しまった。小銭を落としてしまった。しかも六十八枚全部一円玉ーああー。」

ああー、うおー、ひゃー、全財産がー。合間合間に客の顔をちらちらと窺いながら言葉をつけ足していく。うざったいな。

心優しい何人かが渋々と小銭を拾い始める。男は嬉しそうだ。自分の財布に戻って来る小銭を見つめながら鼻歌を歌っている。

「さあ皆さん、全部拾ってくれたら何かいいことが起きるよーはいあと五まい。あ、今四枚になった。」

よく聴くと途切れ途切れに紡がれている歌はポップ・ディランのものであることに気付く。

「何だインチキマジシャン、お前も好きなのか。若いのにいい趣味してんじゃねえかよ。」

「えっ。」

無意識だった。

「あ、僕歌ってました？」

「ああ、歌ってたよ。気が合うな。」

「そんな。」

困る。

「ってことで、その落ちてる一円玉、拾ってくれねえか？最後の一枚なんだよ、それ。」

言われて見ると僕の足元で銀色の硬貨が夕焼けを反射していた。一円玉を綺麗だと思ったのは初めてだ。

拾おうと前屈みになった時、何か体に違和感があった。腹のあたりがむずむずしてきたのだ。むずむずは腹から胸へ胸から喉へと上がっていく。得体の知れない生物が自分の中で動いているように思えてならない。

くしゃみを我慢している時と似たむず痒さに苦しんでいる僕の前に男は財布をさし出した。早く入れてくれよ、と催促する。

一円玉を入れ、僕の口から「う」と漏れた途端財布は下げられた。もう限界だった。えっくしょん！と口から飛び出す。何が？

火が。

直接火が唇に当たる。熱い、なんて言えなかった。それはあまりにも熱かったからという訳ではなく、全く熱さを感じなかったからだだった。神経まで焼かれてしまったのかと持ってきていた靴の中からタオルを探す。見えないだけで、今自分の顔は火だるまなのではないかと思ってしまう。自分の顔を火だるまばすむ話なのに、その時の僕は酷く動揺していた。

靴を漁っている僕の手を誰かが掴んだ。顔を上げるとあの男がニヤニヤと笑いながら

「落ち着けて、燃えてねえだろ。」

と小声で言っている。客を見回す。

「あの、僕の顔燃えてませんか？」

この時の観客の顔を僕は絶対に忘れない。皆哑然とし、口を開きっぱなしで、それでも目は輝いている。バックの空の色も雲の形も一緒に目に焼き付ける。

皆子供なんだ、と思った。ここにいる限り、皆子供に戻りたがっている。

パン、と小気味良い音がした。ライターで煙草に火を点けた青年だった。近くにいた何人かもパン、パン、とやり出す。パン、は徐々に伝染し、街頭にいる全員がパン、パン、と手を打った。

「あ。」

理解するのに大分時間がかかった。

「そうか、これが。」

「おい。」

男が肩を突いた。横を向くと僕の顔の前で手を構えている。親指で曲げた中指を押さえて、まるでこれから何かを弾くような、そんな構えだ。

だとすれば、この場合弾かれるのは。

「オラッ、食らえ！秘技、でこ弾き！」

手でおでこを守ろうとしたが間に合わない。もろに食らう。

観客の「兄ちゃん、大丈夫か。」という笑い混じりの心配の言葉聞きながら、僕の意識は遠ざかって行った。

でこピンを秘技と言うセンスは今でもさっぱり分らないが、彼のでこピンを受けてから僕は超能力が使えなくなっていた。

最初は失敗も多かった普通のマジックは日に日に上達して、最近やっと街頭でパフォーマンスが出来る程になった僕は一番得意なコインマジックをしようと思い、ポケットから二枚取り出す。

両手にコインを一枚ずつ握り、左手で右の袖を捲って何も無いことを示した後、右手を少し上げて袖にコインを落とす。次はその逆。スリー、ツー、ワンで手を開きコインが消えたと思わせる。観客から歓声上がる。この瞬間が一番好きになるまで、その時間はかからなさそうだ。